

子どもと家族と学校と

④

『息苦しくて教室に入れない』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美



「大学っていいですね。講義内容が面白い！通学時間は二時間もかかるけれど、俺、休まず通っています！」

大学入学後、しばらくして、アラタがカウンセリングにやってきた。

・・・大学に休まずに通っている？講義内容が面白いってどういうこと？息苦しさはどうなっているの???以前はこんなに早口で話していた?・・・

私の頭は?マークがいっぱいだが、とにかく、大学の様子を話すアラタは見違えるほど元気で、目を輝かして近況を話し始めた。



早くすませて家に帰りたい

アラタがはじめて家族面接に来たのは、彼が高校一年生のときだった。登校して授業を受けようとしても息苦しくて教室に長くいられない状態が続いた。医師から不安神経症と診断を受け、カウンセリングを紹介された。

初対面のアラタは無口で、懐疑的な目を向けてきた。

面接室の出入口付近に腰かけ、

「早くすませて家に帰りたい」



という姿勢だった。

「ここは、高校とは関係のない場所で、アラタ君のことをお説教するのではなく、どんなことを望んでいるのか、きかせてもらい、そのことが実現するように応援する場所です」

と、カウンセリングのことを伝えた。

怒られない(?)と、わかったのか、少しずつこちらの語りかけに応じていった。

高校生の男の子にとって女性相談員は、ときにわずらわしいだろう。カウンセリングに興味をもっている場合もあるが、多くはウザイと思っている。そのため、大げさな共感せず、心や精神などのヤワな単語はできるだけ少なくして、さらりと接するようにしている。



この髪型はどうしてだめなのか

「高校に入って、こんなはずじゃなかった想定外だったことは、たとえば、どんなことがある？」

しばらく考えてから、

「高校ってもっと生徒に任せてくれると思っていたら、義務教育じゃないのに、もう、いちいちうるさい。髪の毛や持ち物チェックをするなんて考えられない！」

学校の話をしているうちに、だんだん声が大きくなり、興奮してきた。

高校教師の言動は間違っている！とアラタは力説する。

彼が入学した高校は、いわゆる難関大学への進学を目指す学校だった。

第一希望がかなって入学をしたものの、生徒指導の先生に入学後三日目に呼びだしを受けた。

ひっかかったのは、頭髪だった。

彼は、髪を染めて、毛をピンピンに立たせていたので、注意を受けた。

他の生徒は、受験勉強中心の生活をしてきた様子で髪型や服装などに関心が薄かった。背の高いアラタは外見が目立ち、ひときわ浮いて映っていたようだ。また、新しく進んだ高校には、同じ公立中学からともに進学した人はなく、支えてくれる友人もいなかったけれど、クラスメイトとぶつかるようなこともなかった。アラタのいうことには、陰ながら賛成している友達もいたようだ。

どうしてアラタの髪型がだめなのか、うやむやのまま、朝、校門指導の教師に呼び止められることが続くと、うとうとしくなっていた。

母は、

「人に迷惑をかけたりする子ではあり

ませんが、先生から注意されて、自分のことを曲げられなかった。ひっこみがつかなくなった。そんな印象があります」と話す。

母もこの子の髪型は好みではないけれど、そのことでここまでこじれてしまうとは、考えていなかった。

アラタのような態度は、ひとむかし前だと、威勢が良い生徒と受け止められたのかもしれない。単に髪型のことで、そんなにむきにならなくてもと周囲はみていた。

遅刻や早退もしなかった中学生生活は、成績も上位で、クラブ活動も活発、クラス委員も引き受けていた。どちらかというリーダー役だったアラタが、高校に入り、いきなりルール違反の生徒になってしまった。



カウンセラーの学校訪問

彼と家族の希望もあって、カウンセラーは、学校訪問をすることになった。

学校訪問の目的はいくつかあるが、支援には、多方面からの家族理解が必要と考え、面接に来られているときの子どもさんやご両親の様子だけで、わかった気になってはいけない、そう面接を続けながら、いつも感じている。目の前のご家族のことは、他の角度からつまり、学校の先生からの見方もあわせて全体像を把握してから、総合的に考えていきたいと考えるからだ。そのため学校の先生方からの情報はとても重要だ。

もちろん、学校訪問時、教育現場で悪者さがしをするつもりもなく、抗議をしに行くという意図も持ち合わせていない。

おもに、協力体制を築くのが大きな目的となる。

さらに、学校訪問をすると、副産物がある。それは、学校に出かけていくことによって、地域の環境に触れることができる。たとえば通学途中の発見や地元情報なども含めてそうだったのかと実感できることあり大きな意義をもっている。

アラタの学校は、最寄り駅から徒歩 20 分かかり、坂道を上がったところにある。周囲は、一戸建ての家が多い静かな住宅街にあった。この坂道は、新一年生だったら疲れるはずと、通学の実感ができ、校庭の生徒さんたちの様子や校舎から受ける印象もじかに味わうことができる。それは、アラタの気持ちに近づくことになる。



授業が中断しました

事前に連絡をして、担任の先生にお会いした。五十代女性の数学の先生が担任だった。担任教師は、

「アラタ君は、いつも大きな声で話します。どうしてだめなのですかとか、それはおかしいとか、すぐに口にする生徒で、そのことで授業を何度か中断しました」

先生は正直困り果てている様子だった。生徒間でのトラブルなどは全くないが、いつもイライラして、落ち着かない様子だという。

医師の診断書を提出したにもかかわらず、担任の先生には話が通じないとアラタが言っていたことを思い出していた。



外出の難しさ

高校二年生になり新担任は男性の若い体育の先生になった。座席もアラタの望む、一番後ろの席を用意してもらったが、教室に再び入ることはできなかった。

そのころから、人が大勢いるショッピングモールや、電車、地下鉄なども利用しづらくなり、息苦しさや胸の圧迫感をさらに感じるようになった。

欠席日数が重なっていった。

これからのことについて話し合ってみると、

「高校で授業を受けるのは、体が拒否してそうよね。今後、これだけはしておきたいと思っていることは何？」

「高校二年生になってから一日も学校に行っていないので、留年することは決定的。落第は仕方ないけれど、でも大学には行ってみたい」

大学進学を希望してはいるが、将来のことを考えていると気が重く、とても沈んでいた。



大学生の兄は自由！

アラタには、兄がいた。

四歳上の兄は、大学生になってから自由に暮らしていた。朝ゆっくりと起きて、昼から大学に行き、家で勉強する姿もみない、飲み会に参加しては友人の下宿に泊まり、適当にバイトをして小遣いを稼いでいる。親も大学生の兄に、口かましくいわず、思いのままに楽に過ごしていると、アラタは考えていた。

大学に行きたいというよりも、大学生の生活にあこがれているようだった。

このままでは困るので、なんとか大学

に行って、大学生になりたい、どんな方法でもよい、と思うようになっていた。

アラタに情報を伝えた。

長期欠席をしていても、大学入学にはいろいろなルートがあり、通信制高校や、単位制高校への転校、あるいは高校卒業認定試験の利用、そのための予備校やサポート塾などがあることを説明すると、アラタ自身も資料を集めてみるようになった。



高校認定試験を受けてみる

アラタは、単身赴任中の父に何度も電話をして相談し、留年するのは避けたいので単位制高校に籍を移して、高卒認定試験にチャレンジするという目標を立てた。

一方で、外出も自由にできるようにしたいとすすんで自律訓練法を受けた。

少しずつ、アラタは高校のことは口にしなくなり、認定試験に焦点をあてていった。

受験当日、教室に長い時間座り続けていることができるのかの心配はあったものの、記入したら、すぐに退室することでなんとか乗り切れた。あっという間に認定試験は合格した。

ことのほか時間がかかったのは、そのあとの大学受験勉強で、志望校に届くまでにかなり苦勞をしていた。

予備校の大教室での講義は負担が大きいのでとりやめて、ビデオ学習や通信添削で入試に備えることになった。

通信制の大学も候補に挙がったけれど、兄のような生活モデルがあったので、通学部を選び、やっと大学生になることが

できた。



充分ですと母

アラタの傍で、母親は、

「この子は、不器用な子だと思います。たとえば、自分は好き勝手にピアノを弾いて大きな音を出しているのに、隣の家ドライヤーの音がうるさくて勉強できないから引越してほしいと、無理難題をいうのです。そんなことをいうのは、ただのわがままだと周りは思いますよね。本人はやかましくてしかたなくて、文句ばかりいうのです。文句は言いますが、やりたいことはしっかりもっているのです。それはこの子の良いところだと思います。同級生より一年余分に時間はかかったけれど、浪人して入学したと思ったらそれで充分です」と、ふりかえる。

今、大学では、彼を理解してくれる友人も多く、仲間も増えている。もちろん、息苦しさはなくなったし、学ぶことの楽しさもわかってきた。

このところ、気になっているのは自由になるお金が足りないこと、そのために長期休みに、牧場で住み込みのアルバイトをする予定だという。

動物好きなアラタには、ぴったりだ。人の多い都会よりも、自然に囲まれていることがアラタには向いているのかもしれない。

次はどんな話題を持って、報告に来るのか、楽しみにしている。